とあるネギと一方通行

もち丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とあるネギと一方通行

【Ｎコード】
Ｎ３１７５Ｋ

【作者名】
もち丸

【あらすじ】
とある魔術の禁書目録の一方通行の能力を手に入れた青年がネギま（モンハンもあり）の世界で大暴れ！？
厨ニパワー全開フルスロットル！！
笑いあり・感動あり・勘違いあり・原作ブレイクあり・ＴＳあり・暴走あり・邪気眼（笑）あり？の怒涛の展開！
最強の力を得た彼の未来に何が待っているのか！
どうぞ、お楽しみください。
注意）この作品は最強をはじめ、多くの厨ニ的要素が含まれます。

気合を入れてご覧ください。

1時間目　　闇魔様ってなんなのさ？

『紅き翼』
この魔法世界において知らない者がいないと言われる正義の代名詞“サウザンドマスター”ナギ・スプリングフィールドを中心とするチーム。
両手で足りる程度の人数ではあっても一人一人がまさに一騎当千の猛者であり、国を相手にしても負ける事を知らない最強の集団である。

その中に彼はいた。
異端の中の異端。
最強であり未知。
生まれながらの勝者。
白き髪と真紅の瞳を持つ彼の存在は有名で、それは偏に彼の類いまれなる能力と容姿に起因するものである。正義でありながら異端の集団『紅き翼』の2番目のメンバー、つまり創設者での1人ありながら戦場に立つのにそぐはない姿をもつ彼。
曰く、『純白のサヴァン』
これまでに有名なのは、戦場に立ちながら一度も傷を負う事がないことよりも単に彼の姿がまだ生まれて間もないせいぜい5～6才程度の少年であったからだろう。
とにかく彼は不思議に満ちていた。

そして時は、英雄が彼と出会った頃の話。
英雄と無敵が創り出す伝説の始まりの日のことである。

？？　？◇　？　？　◇　？　？　◇　？　？　？◇

突然だが、俺は死んだ。
どうやって死んだかなんて覚えていないが、とにかく死んでしまったことだけは覚えている。
死んだあとの世界なんて、コレっぽっちも知らないし、世の中……ましてやあの世なんて俺の知らないことばかりで溢れている。
それは認めよう。
俺も生まれてまだ１７年しかたってなかったんだから。
それでも認めたくないものがあり譲れない物があるつもりなんだが、これは一体どういうことなんだ？目の前の光景に疑問しかもてないのだ。

「おめでとーございまーすぅ～！！！！
なんとなんと～あなた様は、死者の國特別イベント『今から１００人目に死ぬのは誰でしょ！？』において、あなた様が丁度１００人目になりましたのでぇ～
閻魔様こと私の権限により自由に転生することが許されたのですのですよぉ。
やったねぇー！！」

「……なんなのさ？」

燃え盛る地獄のマグマに囲まれた中、俺の目の前には異常な程にテンションがおかしい自称閻魔様がすげぇ笑顔でバカでっかい椅子に座っている。

紅黒いごつごつした椅子のまわりには骸骨が散乱しており、その中心に位置するところには、まだ少女のような身なりでありながら、全身に隈無く呪術的な刺青を施しており、それは見ているだけで呑まれそうな意匠の刺青である。
そのためか禍禍しい空間の中に馴染んでいるのは、彼女の為せる業だろう。
正直今まで見たこと無いタイプだった。
それが、彼女の第一印象だ。

「だーかーら、私の力で次の来世をあなたの思うがままに出来るのですよ」

OKー分かってきたさ。
つまりあれだろ、この状況はよくある二次創作のあれなんだろ。まさか、本当にこんな事が起きるなんてな……
でも、まーここは無難なこと言ってた方がいいって決まってるはず。

「そうなの？んじゃ、すげぇ金持ちのイケメンにしてくれよ」

変になんか言ったら最後だろ。
いきなり、戦いに巻き込まれて世界を救うってのも嫌な訳じゃないが……さすがにそんな事までは、できないだろ。
現実と夢の区別ができない程俺は腐っちゃいねぇよ。

「えぇー！？そんなのつまんないよぉー」

つまんないってな……
俺の来世のことなんだよな？

「私の力なら、漫画の世界に行くとかよゆーなんだよー！

せっかく、なんだから楽しいことしようよー」

そんな事もありなのかよ……

っでもなぁ、いきなり漫画の世界に行けるとか言われても思いつかないしさ。

「じゃーさ、あなた様が生前の最後に読んだ漫画の世界に行くとかどうよ？」

っえ！？

俺の考え読まれてるのか？

「私、闇魔様なんだよー

バカにしないでよね！読心術なんて簡単に出来るんだから」

もはや、なんでもありなのな。

それはそうと、俺が最後に読んだ漫画は……『ネギま！？』だったか？

確か、ネギが魔法世界でフェイトと本格的に戦いだしたあたりだった気がする。

「じゃあ、『ネギま！？』の世界で決定でございまーす。

でもーただ転生するだけじゃつまんないですのでー

あなた様の魔力と気をナギ・スプリングフィールドの１０倍にいたします！

さらにさらにーあなた様の希望の特殊能力を１つ差し上げちゃいます！」

なにさ、その最強設定。

しかも、それに希望の特殊能力が付くとかどんだけチートなのさ？

「あのさ、その特殊能力ってのは他の漫画の特殊能力でもいいのか？」

そういうと、俺の目の前にいる自称闇魔様はニシシッと小さな子供のような笑顔を浮かべる。

「当たり前でございますよー
私は自称じゃないですからね、みんなが認める他称闇魔でございますよー」

ーーーーあっいやっ／／
そういや読心術つかえるんだったな。てか他称ってなにさ？
でも他の漫画の特殊能力つかえるんだったら、あれ以外無いよな。
あの能力だったら怪我する事は無いし、死ぬ事は無いもんな。

「能力なんだけど、『とある魔術の禁書目録』の学園都市最強こと一方通行（アクセラレーター）の能力とかあり？」

学園都市最強・一方通行（アクセラレーター）の能力［超能力］
運動量・熱量・光・電気量ｅｔｃといったあらゆるベクトル（向き）を観測し、触れただけで変換する能力。？
普段は「反射（ベクトルの反転）」に設定されており、ありとあらゆる攻撃を自動的に跳ね返してしまうという最強の能力。
正直、これさえあれば魔力とかいらない位なんだしな。

「いーねぇ、その最強能力！遠慮とかないところが最高だよ」

ウインクしながら右手をあげてピースする闇魔様。今更だけどめちゃくちゃ可愛いよな。

「可愛いとか／／えへへー。
ではでは特別に記憶もそのまま残してあげるでございますぅ！それでは、新しい人生をお楽しみくださいですよ～」

闇魔様がそういうのと同時に右手を掲げて指を鳴らすと、地を捉えていた足の感覚がなくなり不安定になると同時に重力を感じれなくなり、上下の認識が困難になると世界から光が奪われるかのように視界が暗闇に包まれ意識が薄れていった。

「えへへ～私を楽しませてくださいですよ！」

最後に聞こえたのは闇魔様なのに小悪魔のような声だった。

1時間目　閻魔様ってなんなのさ？（後書き）

勢いで書いているところがありますので、誇示脱字または文構成がおかしい場合は是非ぜひ教えてください。
また、アドバイス・リクエスト等もよろしくお願いします。

2時間目　　魔法を舐めたらあかんぜよ

あれから、3年がたった。

俺は手に入れた能力のせいか白髪の紅眼という姿ではあったが無事に転生することができた。
しかし、生まれてからの1年位は本当につらいものがあった。
流石に17才の精神状態で子育てされるのには問題があり、まず自分の足で動くことができないせいで全て親まかせになったり、特に母親の母乳を吸うのとかは、母親が若くて綺麗すぎたのもあって正直本当に顔から火が出るかと思う程に恥ずかしすぎた。
次につまづいたのは、言語の違いというやつで、これについては、産まれたばかりの幼子ということで本来の赤ん坊のように徐々に獲得していけば良いので特になんということもなかった。

ただ問題は、俺の魔力の潜在能力にあった。
闇魔様の好意のお陰で正直、無限とも言える程の魔力を秘めて産まれてきた俺は、当然の流れの如く話題となり、村の上層部が俺への対応として危険因子とならないうちに排除すべきというところまでなったらしいのだが、それを村の重鎮である、おばば様とネコートさんのお陰で観察処分ということに落ち着いたらしい。

ネコートさんという名前で気づいた人もいると思うが、俺の産まれた村の名前はポッケ村である。あの雪山の麓に位置するポッケ村で間違いない。
さらに言うならば、前世で俺がはまっていたゲームのポッケ村でまちがいないのだ。

……実に不思議なことに、魔法世界でありながらモンハンのポッケ村に産まれ異常な魔力を持つ俺が何の問題もなく生活出来ることなんてなく、自分の足で自由に走り回れるようになった2才の頃に事件に巻き込まれたことをきっかけに当然の如くハンターとして働くことになった。

その事件は突然のことだった。
俺の父親は村でも有名なハンターであり、その日もドドブランゴを討伐するために手に鬼神斬破刀を持って雪山に登っていった。

父親が雪山に着くと、ドドブランゴを討伐するために雪山の奥深くまで進んでいった。
しかし、その日の雪山はおかしかった。目的のドドブランゴどころか他のモンスターさえも眼につくことはなく気づくとモンスターに遭遇する事もなく雪山の最深部にまで到達していた。
この時に雪山の異変に気づいていればまだ違う未来が待っていたのかもしれなかった。
そして、それは突然、前触れもなくやって来た。
古龍・クシャルダオラ
圧倒的な風の……いや、嵐の王者。
ただ、こいつに出会って生き延びれる程に父親は強くはなかったのだ。そう、クシャルダオラによって村1番のハンターは姿を消した。

クシャルダオラが去ってから父親の捜索をしたのだが、結局俺の手元に残った鬼神斬破刀以外を見つけ出す事ができずに、父親はクシャルダオラによって殺されたとして収集される事となった。

それからというものの、自分の魔力と能力にモノを言わせてクシャルダオラを倒すために母親の反対を押し切ってハンターとなった。
ベクトル操作の能力のお陰で傷一つ負わずに2才というハンデは大

きかったが脳の演算能力が許す限り、ただひたすらにハンターとして名を上げて今ではこのポッケ村で俺以上のハンターはいないと言えるまでになったのだった。

そして、現在に至る。

「おばば様、リオレウスの討伐完了したぞ。
他になんか依頼はないかい？」

俺はリオレウスの宝玉をおばば様に見えるように手にした。

「あんたは、少しは休みな。
この前もディアブロスを倒してきたばっかだろ？ちったぁ、自分の体ってもんを考えな」

この姐御口調はネコートさんだ。
俺の事をいつも心配してくれてこの村の中で俺を子供扱いしてくれる数少ない仲間だ。
ほとんどの村人は俺を英雄か悪魔の子供のどちらかで見てくるのでネコートさんのような人はありがたい。
一方おばば様はというと、「ごくろうさん」と一言告げて宝玉を受け取るりすぐ傍の箱の中に保管した。

「今は、あんたに回すような仕事は無いから家に帰って疲れをとってきな」

「大丈夫だって、それに『あたしの言う事が聞けないってのかい？』
……そろそろ、家で休みたいなーとかおもってたんだよ」

ちょー怖い。

ネコートさん自慢の爪を戦闘準備にしている、なぜかあの爪だけはベクトル操作しても障壁を張っても防げないのだ。
ギャグ補正ってやつ？

「それじゃ、早く帰りな」

「あぁ、わかったよ。
じゃーまたね、ネコートさんおばば様」

おばば様は『またの』と一言言い、ネコートさんはぷいっとそっぽを向いた。
そして、俺はネコートさんに脅される形で家へと歩みを進めた。

ネコートさんってツンデレ？

？？　◇　？　？　◇　？　？◇　？　？◇

家に帰る途中。

「おい、坊主！調子はどうでい？
刀は錆付いてねぇか？」

威勢のいい掛け声をだす青年・ジンさん。
背は高く１８０ｃｍほどで、短髪の黒髪にねじり鉢巻をつけて甚平を羽織るのがジンさんの基本スタイルだ。

村で唯一の鍛冶屋であり。
その腕は武器をうつこともさる事ながら、刀に関しては其処らのハンターでは、かなわない程の腕前の持ち主であり、俺の大太刀の師匠兼練習相手である。

「ジンさん、俺を誰だと思ってんだ？
リオレウス如きで刀を傷つけたりしないよ」

そう言うと、ジンさんは豪快に笑いだした。

「こりゃ、失礼した。
『鬼神の童』にとっちゃ空の王者リオレウスでも役不足だったてか？」

「そんなんじゃない。
ただ今日は魔法での討伐だったから、大太刀の出番がなかっただけだよ」

最近は、ベクトル操作に頼りすぎている感じがしてきたので制限をつけてモンスターの討伐をしているのだ。
そして、今日はたまたま魔法限定だったってだけだ。

「そんな悲しいことするなよ。
俺が丹精込めて鍛え直した得物だぞ、刀は使われてこそ刀なんだ」

しかし、ジンさんはというと。
自分が鍛え直した刀を使われなかったのが悔しいのかその大きな体が小さく見えるほどに落ち込んでいる。
ほんと見ていて飽きない人だ。

「今度は刀と気だけでやるから心配しないでくれよ。
それじゃ、家に帰らないといけないからまたねジンさん」

「おう、また会おうぜ」

切り替えがいいのがジンさんの長所だ。

??◇?◇?◇?◇?◇

村から少し離れた場所に俺の家はある。
父親が村1番のハンターだったという事で、かなり大きい木製のログハウスであり、簡単に言えばセレブの別荘という言葉が似合う館物である。
我が家は、俺がハンターを始めた事でお金に苦しむ事もなく自由に暮らす余裕はあるのだ。

「ただいまー」

分厚い木の扉を開き玄関が見えると、2階からドタドタと喧しい音と共に1人の女の人がやって来た。

「おっかえりー♪♪ご飯にする?お風呂にする?それともあたし?えへっ／／」

まー、こんな人だが俺の母親だ。
とにかく言える事は、まったく母親に見えないのだ。淡い栗色の髪

の毛を腰まで伸ばし、目も大きく足は細くて制服を着れば高校生でいけるような、そんな人なのだ。
この人を見た時に、漫画の世界に来た事を実感したのだと言っても過言では無い。

「それが3才児に対する母親の態度か？しかも、えへっ／／ってなんだよ！！」

「うー、わりと本気なのにぃ」

性格はこんなんなんだが……

「いや、それダメだから……」

そう言うと母親は、口を膨らませて腰に手をあてて怒った素振りをしだした。
あぁー、母親なのに可愛いすぎるだろこの野郎がよー！！

「俺も疲れたし、ちょっと寝てくる」

そう言って、玄関で靴を脱ぎ寝室（3才児なので母親と同じ）に行くために2階につながる階段をのぼりだした時。

「えぇー、なら添い寝してあげようか！いや、添い寝していいですか？……添い寝します」

「拒否権なしかよ！」

「ジョークだよ、もしくは冗談？」

疑問系で聞かれてもな？

「そんじゃ、寝てくる」

「っあ！！あとね、起きたらポッケ農場のはずれの山にこいってラカンさんが言ってたよ」

「わかったよ。ありがと」

ラカン……初めてあった原作キャラだ。

とにかく今は気合いバカだとだけ言っておく、詳しい事は本人にあった時にでも話すから。

「はいはーい、じゃイイ夢みろよ！」

腰に片手をあてて、親指をグッと立てながら満面の笑みを浮かべて口にしていた。

……あんた、本当に母親なのか？

2時間目　　魔法を舐めたらあかんぜよ（後書き）

予定ではありますが、
モンハン編をあと2～4話程したあとに紅き翼編に入り終わり次第、
原作に介入する予定です。出来れば10～15話の間には原作に介入したいです。

3時間目　Do you want to travel??

ポッケ農場付近の山。
通称『龍哭山』
最近おぞましい龍が住み着いたせいで常に龍の轟が響き渡ると言われ、村人は恐れのあまり寄りつかない山である。

しかし、その実態は……

「よぉ、シロ！元気にしてたか？」

こいつが住み着いたせいなのだ……

後の『紅き翼』の英雄。
サウザンドマスター唯一にして永遠の好敵手『千の刃』『伝説の傭兵剣士』とよばれる男。
ジャック・ラカン
もっとも、今はまだ『自由を掴んだ最強の奴隷剣闘士』という二つ名しかない状態なんだがな。

なんの因果か、半年前に山で倒れていたラカンを俺が助けたら、お礼として俺を鍛えてくれる事になったのだ。
頭の方はあれだが、戦闘技術に関していえば右に出るやつはいない。
刀さばきはジンさんに教わってたから、それ以外の魔法技術等をラカンに教わっている。

魔法なんだが、閻魔様からもらった一方通行の能力つまり超能力が、原作の方では超能力者が魔法ないし魔術を使ったら体がが耐えきれずに血みどろになるっていう設定があったから最初の方は魔法を使わずに過ごしていたのだが、魔法という未知の誘惑に負けて魔法を使ってしまったのだ。
すると、難なくなんの弊害も血みどろになるっていうこともなく無事に魔法を使いこなすことができた。

これは、おそらくではあるのだが、この世界つまり『ネギま』でいう魔法とは己の魔力を媒介に精霊の力を引き出して奇跡を行使するモノであり、一方、『とある魔術の禁書目録』の世界でいう魔法＝魔術とは、教典や信仰における神々の奇跡のことであると考えれる。だから、もともとこの世界とは別形態の魔法であるから超能力者における反動がなかったのだと思われる。

ちなみに龍が哭くってのの正体は、俺とラカンの戦闘特訓の弊害みたいな物だな。
まぁ、そう言ってしまうと俺も原因の一端を担う事になっちゃうかもしれないが……
そんなこと俺は知らん。

ちなみにシロってのは、俺の髪が白いからという理由でつけられたあだ名の事だ。

「いや……昨日も会っただろう」

「ん？そうだったか？」

わざとか？
わざとなんだろ？

「間違いなくそうだ。千の雷の練習で俺をぶっ飛ばしたこと忘れたとは言わせねぇぞ」

後ろを見やがれってんだ！

昨日、お前が力任せに千の雷を放ったせいで山がえぐれてるじゃねぇかよ。

俺も、とっさにベクトル操作をしたんだが魔力ってやつが不明確ということと、闇魔様が一方通行の能力を使うということで脳を強化してくれたのか、この体になってから前世では考えられない程に脳の回転が早くなったり、一度でも見たり聞いたりしたら暗記できるという素敵機能まで搭載されたのだが、体が3才児のスペックということで演算処理がおいつかずに知恵熱でぶっ倒れてしまったのだ。

あれだね、もうこれは幼児虐待とかそんな生易しいもんじゃないね。

しかし、一方ラカンはというとそんなこたぁ知らねってな感じで昼間から酒樽を持ち上げて直接飲んでいる。

「ハッハッハ気にするなよ！

男がそんな小さな事気にしてるようじゃ先が知れてるぜぇ！？」

……そうだったな。

お前ってそういう奴なんだったよ。

漫画読んでた時にも思ってたけど、実際にあって見たらそんなもんじゃないと実感させられた。

「もーいい、気にしてないし。

んで？用ってなんなのさ？」

すると、ラカンが飲んでいた酒樽を口から話して急に真面目な顔に

なると途端にあたりが静寂につつまれた。

「あーそれか。
シロ、お前さ俺と一緒に旅しねぇか？」

……

……？？

「……はい？？」

「だから、俺様と旅しねぇか？」

何を言ってんだコイツハ？？

「いや……俺３才だぜ」

俺がそういうと、ラカンは酒を一気に飲みほして口をひらいた。

「ハッハッハ！！今さらそんな事言ってんなよ。俺様と引き分けできる奴なんか世界に２人もいねぇぞ」

もうなのか？
もう原作が始まるってのかよ……

せめて、体が１０歳を超えてから位にしてもらわないと演算能力が不安すぎる。
体自体は俺が前世の記憶を持ってるおかげか、もしくは閻魔様の好意かは分からないが今でも３才児とは思えない程のスッペクでこのまま成長すればスパコン並の演算能力を持つといわれる本家の一方通行並になれそうなんだが、いかせんまだ幼すぎるせいで２つ以上

のベクトル操作が苦手なのだ。

とは言っても、ラカンよりも弱いやつらならベクトル操作を使うまでもないんだが、確かラスボスの創造主って奴はラカンの両腕を一撃でもぎ取ってただろ。

そんな奴と戦うのに、この演算能力じゃ厳しすぎるだろ。怪我とかしたくないもんさ。

「ってもよぉ、法律とかあるだろ？」

「そんなもん無視すりゃいいんだよ！無視」

ちょ！？

無視ってなにさ、無茶苦茶過ぎるだろ！

「嬉しいけど、母さん残して旅は出来ねぇかな」

原作介入がしたくないって訳じゃないんだ。

ただ、この世界に生まれてきて俺にも大切なモノができてしまったんだよな。

「まぁ、今すぐ答えが欲しい訳じゃねない。

俺様は、明日の昼にはここを出るからそれまでに答えを出せばいい」

「……わかった」

「そいいう事だ。んじゃ、いっちょ酒でも一緒に飲むか？」

ラカンは、沈んだ空気を吹き払うかのように背中から酒を取り出して俺に突きつけてきた。

ってか、これウォッカじゃねぇか！

「だから、俺はまだ3才だっての！」

流石に3才児が飲んだら死ぬって……

「ハッハッハ！！なら、仕方ねぇな。
またなシロ」

豪快にウォッカを飲みながら笑顔で話しかけてくるラカン。旅かぁー。

「あいあい、じゃーなラカン」

旅への答えで頭を悩ませながら、俺はラカンに背を向けて我が家のあるポッケ村へと歩みを進めた。

?? ?◇ ? ? ? ◇ ? ? ?◇ ? ? ?◇

原作介入かぁ、せっかく漫画の世界に転生したんだしやってみるのも悪くは無いと思うけど、今の生活も充分楽しいしな。
ラカンと一緒ってことは俺も喧嘩ふっかけて仲間になるってパターンかね？
でも母親も父親が消えて、そのすぐ後に3才児の息子が旅に出るとかなったら、流石に可哀想すぎるし……

「ってもなぁー」

あぁーちくしょぉ、わかんねぇ！

山から出て家へと向かう間、ずっとラカンとの旅のことを考えていると慌ただしい村の人々の声が聞こえてきた。

「なにかあったのか？」

すると、道の先から頭にねじりはちまきをつけた大柄の男の人が、必死になってこちらに走ってきている。

「っおい！！坊主、大変だ！！」

ここまで走ってきた男はジンさんだった。しかし、そこにはいつもの人をからかうような顔はなくなにかに追い詰められたようなそんな顔になっている。

ジンさんが、ここまで取り乱すなんて……

ほんとになにが起きてるんだ？

「どうしたんだよ？ジンさん。

そんなに取り乱しちゃって女に振られたのか？」

「そんな冗談言ってる場合じゃねぇ！！」

ジンさんを落ち着かせるために軽い冗談のつもりで言ったのだが、ジンさんらしからぬ大声で否定された。

「……？？」

ジンさんは、走ってきて乱れた息を整えると俺の目を見て真剣なさまで口を開いた。

「雪山に出たんだよ！あいつが！！」

「……出たってなにがさ？」

そして、次の瞬間ジンさんの口から出た言葉は俺の冷静さを奪い取るにたやすい言葉だった。

“クシャルダオラ”だよ！！」

……

……

……

……っプチ。

俺の中でなにかが切れた音がすると、俺はなにも考えずに家へと向けていた足を雪山へと変え、身体に気を纏い早く、早く雪山につくために空気抵抗・重力・動摩擦力・摩擦ではっせいされた熱エネルギーなど考えうる全ての抵抗を前方方向への加速へとベクトル変換した。

その早さは瞬動の完成系瞬地をゆうに超えマスター級でも目におえない程の早さ。

世界でもっとも早いスピードをだし、自身は膨大な魔力における障壁で身を守っているものの俺の通った後は衝撃波でボロボロの残骸

とかしていた。
そんな状況で人の声が聞こえる訳もなくただひたすらにクシャルダオラに会うためだけに走ってゆく。

「おっおい、坊主！！待てぇ！！！！！」

ジンさんの叫びは、俺に届くことはなく虚空へと散るばかりだった……

3時間目　Do you want to travel??（後書き）

方向性がまだまだ決まらずに困ってます。
なにかイイ案がありましたら是非ぜひ感想までよろしくお願いいたします。

４時間目　　龍と俺と時々フェイト（前書き）

第３話におきまして、説明不足なとこがあったので、改善してみました。よろしければ、もう一度ご覧ください。
見なくても話の流れは変わってないので支障はありません。

では、４時間目はじまります

4時間目　　龍と俺と時々フェイト

あらゆる生き物を拒絶するかのように降り積もる雪。
先が見えなくなる程に雪を巻き上げ視界をふさいでくる豪風。
そんな状況化の困難な気候に反抗するかのように適用し暮らしていた動物たちの姿が今はカケラさえも見えない。

まるで最初から其処に存在しまなかったかのように……

古龍・クシャルダオラ

圧倒的なまでの力による暴力。
まるで、王者のように触れることさえ許さないとばかりに体を覆う嵐の防護壁。
咆哮を開けば圧縮された空気の塊を放つ、それは形のない攻撃のために生身では防御することも叶わない絶対の攻撃。

動物たちは、その圧倒的な力を感じると抵抗するまでもなく、唯々己の命のために誇りさえも投げ捨ててその場を去る。
故に、古龍の住みし所には生き物の生命を感じられることが出来ないのだ。

其処を俺は地面を穿ち土と雪を巻き上げながら、生物が拒絶する絶対の王者へに出会うために突き進んでいる。

そして、そいつは氷に覆われた洞窟を超えた先にいた。

まだ、こちらに気づいてないのか一心不乱に足下に踏みつけているポポをむさぼりついている。

……いい度胸してんじゃねぇか

『どりゃあああぁぁーー！！』

気合を入れながら、スピードそのままに天に向けて高く翔ぶとライダーキックよろしくの如く、クシャルダオラの脳天めがけて嵐の防護壁もろとも蹴りぬいた。

『グギャャァァオオオー』

吹き飛ばされた勢いで氷の壁に張り付いているが、そんなこたぁ知らねぇ。

こいつに俺は言っておきたいことがあるんだよ。

「やいやい、てめぇ！！
1年前のこと忘れたとはいわせねぇぞ」

クシャルダオラは、今だ氷の壁で動きそうな様子もない。
そして、俺は右手を水平に上げ右手の人さし指でクシャルダオラを指さしながら言葉を繋げる。

「お前がなぁ……お前が勝手に父親殺してくれたせいで、こちとら2才の頃から生き死にの狭間を行ききさせられてぇんだぞ！！
どう、落とし前つけてくれるんだぁ！？」

父親が消えたあと、村に侵入し我が家を踏み潰しかけてたティガレ

ックスを、俺が踏み潰してきた威力をソックリそのままベクトル操作で反射し撃退したら、村の連中に変な目で見られて流されるままにハンターになってしまった。

わかるか？たった２才のころから村人全員からの集団無視だぞ！

今なら、ナルトの気持ちがわかる気がするぜぇ。九尾がなんだってんだよ、この野郎！！

「ほら、取り敢えず土下座でもしてもらおうか？クシャルダオラさんよー」

そもそも、こいつが村の警備をしていた父親を消したのが原因なんだろ？

俺の二次創作の王道最強系ハーレム計画を壊しやがった、お前は闇魔様が許しても俺が許さねぇぞ。

『ぐぅぎゃあぁぁぁ』

先程の俺の攻撃は聞いてないとばかりに、けたたましい程の叫び声をあげるクシャルダオラ。

怯みそうになったけど、そこはラカン直伝の気合いでカバー。

「取り敢えず、もう一回ぶっ飛べ！

“ラカン流・俺だって幼稚園行きたかったんだよビーム”（闇の精霊１０１柱集い来りて敵を射て『魔法の射手　集束・闇の１０１矢』）」

手のひらから、闇としか言えない程に純粋な黒の渦が湧き出し、それらが１０１本もの閃光に変化しながらクシャルダオラめがけて放たれた。
しかし、クシャルダオラも何の抵抗もなしに倒される訳もなく口を大きく開けるとそこから莫大な密度の風の塊が放たれた。
純粋なる黒の閃光と雪を巻きあげる風の塊は、丁度俺とクシャルダオラの中心でぶつかり一種の爆弾のように互いを消滅させ、その衝撃波で視界が雪で覆われた。
視界が雪で覆われ前が見えなくなった刹那。それを待っていたかのようなタイミングでクシャルダオラが近づき俺をなぎ払おうと尻尾を鞭のように払う。

「グギャァァオオ」

「甘い、甘過ぎるぞクシャルダオラ！
ベクトル操作　？変換　？パターン反射」

襲いかかる尻尾にたいして俺は片手を突きだした。そして、触れたその瞬間、本来なら俺をなぎ払うべきだった運動エネルギーが、そのまま逆方向へと反射された。
すると、クシャルダオラは尻尾を振っていた方向とは真逆の方向に一回転をし地面に倒れた。

「そんじゃ、そろそろクライマックスだ！」

クシャルダオラが倒れたその時に俺は魔法の詠唱を始める。

「来れ？深淵の闇　燃え盛る大剣　闇と影と憎悪と破壊　復讐の大

焔　我を焼け　彼を焼け　そはただ焼き尽くす者『奈落の業火』
左腕　術式固定
さらに
契約に従い　我に従え　高殿の王　来れ　巨神を滅ぼす燃え立つ雷霞　百重千重と重なりて　走れよ稲妻　『千の雷』
右腕　術式固定
この２つを、ベクトル操作　変化　パターン融合」

右腕に『千の雷』
左腕に『奈落の業火』をエヴァの固有技能『闇の魔法』の準備段階のように固定化させた２つの魔力の塊をベクトル操作で強制的に１つの魔力の塊へと変換させる。

「遠隔補助　魔法陣展開　第一から第十　目標補足　範囲固定　域内精霊圧力臨界まで加圧　３…２…臨界圧
全力解放　『灼熱の豪雷』」

重なり合わさり１つとなった魔力の塊は、俺の一声により暴れ狂い数多の雷の光線に紅黒い業火が纏わりつき、その全てがクシャルダオラへと向けられた。

俺が編み出した固有能力。
『魔法の融合』
本来なら混ざり合うことのない魔法どうしを、ベクトル操作における演算機能で制御するという固有能力。
闇魔様から貰った、古代語呪文を乱発できる位の異常な魔力と、それを制御できるベクトル操作能力を持った俺にしかできない固有能力だ。

欠点としては威力が強過ぎるから周囲に障壁を張って、さらに範囲

固定で範囲を狭くしての攻撃だから詠唱中は無防備になるし、集中力が半端ないのだ。

一方、倒れていたクシャルダオラだが、余りにも異常な魔力の集束に恐れをなしたのか体を風の防御壁で覆う。

そして、遂にクシャルダオラの風の防御壁と灼熱の豪雷が激突した。

刹那ー

一瞬、辺りが音一つない静寂につつまれた。

そして次の瞬間、先程とは比にならない程の爆発が衝撃波とともに押し寄せてきた。

俺はというと先程のベクトル操作で演算能力を使い果たしたので、襲いかかる衝撃波とそれによる雪崩を全魔力を込めた障壁で身を守る。

……

……

……

一時間たっただろうか、もしかしたら１０分もたっていないかもしれないが雪崩れがやみ、次第に視界が明らかになってきた。

そして、その眼に映ったモノ。

それは、完全に地形が変わった雪山。

そして、体を覆う鋼のウロコは見るも無惨にはげ、翼は片翼が完全に根元からもぎ取られ身体中にヒビが入り完全に息の絶えたクシャルダオラの姿があった。

「やっちまったな……」

範囲固定で被害を抑えたつもりだったのだが、完全に山の形が変わっている。
こりゃ新しく地図作んなきゃダメだな。

「まー、山がなくならなかっただけよしとしますか」

もし範囲固定がなかったら、どうなるか？やった事ないからわかんないけど軽く雪山位は地図から無くなるだろうね。

「そんじゃ、剥ぎ取りでもしますか」

剥ぎ取りこそハンターの本分なり。
まだ、攻撃に対して無事だった部分を剥ぎ取ろうとクシャルダオラの元へと歩いていく。

「すごいね、君。
クシャルダオラが一撃でやられるなんて思わなかったよ」

突然、地形の変わった山の頂きに白いスーツ姿の青年が現れた。

あれって、もしかして……

「あっ申し遅れました。
僕の名前はフェイト・アーウェルンクス。親しみを込めてフェイトと呼んでもらって構わないよ」

……．やっぱし。

フェイトかよ。
ラカンの旅もそうだけど、展開が早すぎなんじゃないのかい？
「どうしたんだい？豆が鳩食ったような顔しちゃってさ？」
「いや、それ怖すぎるだろ」
正確には、鳩が豆鉄砲食らったかのような顔が正解だ。意外とフェイトってギャグキャラなの？
「やっと、喋ってくれたね」
っく！！計られたか！！
「実はさ、異常に強い幼児がいるって聞いて、ここに来たんだけど君で間違いないよね？」
「……」
「だんまりかい？まぁ、いいさ。
それより、君。
僕の仲間『完全なる世界』に入らないかい？君のあの実力なら一気に幹部なんか余裕だよ」
誘われっちたよ。
でも、『完全なる世界』って結局、ナギによって負けちゃった組織だろ。
流石に負けるとわかってるのに、仲間にはなれないよな。
「俺、３才児だぜ。

組織に入るとか無理、まだ幼稚園にも入ってないんだからさ」

「そっか。
ならこの話は忘れてくれ、今日は人における古龍種の制御実験のついでだったからさ。
君に豪快に倒されてしまったけど実験は、完成したと見ていいかな」

「っな！？」

古龍種の制御実験だって？
なら、もしかして……

「おい、フェイト！！
お前、１年前にもここに来なかったか？」

フェイトは、考え込むそぶりをすると、意思のこもっていない目で俺を見ながら口を開いた。

「来たよ。
この村で１番のハンターがいるって聞いたから、どんなもんかと実験のついでに確かめてみたんだけど、呆気なかったね。
１０分も持たなかったよ」

やっぱりこいつがやったのか！
なら、黒幕はクシャルダオラじゃなくてフェイト、こいつだったんだな。

「許さねぇぞ、フェイト！！
降りて来やがれ」

フェイトは、俺の声をきくと一笑した。

「ッフ、やめとくよ。
今の僕じゃ君に勝てそうにないからね。
それじゃ、また機会があったら会おう」

「おっおい、待て！！」

フェイトは、水に解けるかのようにしてその場から消え去った。
無詠唱の転移魔法。
改めてみると、かなりの使い手だってわかる。おそらくあのまま戦っていたら、最後にたっているのはフェイトだったかも知れない。

まぁ今、消えたフェイトのこと考えても仕方ないしとにかく、取り敢えず今はフェイトのことは思考の隅に追いやって剥ぎ取りでもしますか。

はぁー、こりゃ答え決まったかな。

それにしても、豆が鳩食ったようなか……

こわっ！！

4時間目　　龍と俺と時々フェイト（後書き）

引き続き、アドバイスまたは指摘等をまっております。

5時間目　　覚悟と旅立ち（前書き）

今回は長くなりそうだったので、２つに区切りました。
まとめて読みたい方は、もう少しお待ちください。

それでは、５時間目はじまります。

5時間目　　覚悟と旅立ち

「……ごめんなさい」

「なんのことだい？
あたしに詳しく教えてやくれないかねぇ」

只今、村にて3才児土下座中。
目の前には、二足歩行の合羽みたいな民族衣装を身につけたネコ。
ネコの隣には、石像のように動かない小さなおばば様が何も言わずにポツンと立っている。

シュールすぎやしないかい？

「あの……山を壊してしまいました」

そして、この状況でこのセリフ。
なんのコントだよ！って感じだけど、正直なところこれが現実で俺のおかれた状況なのだ。
まさか、こんなセリフを人生で口から発するとは予想も予感もしなかったね。まぁ、予想してたら、してたで怖いモノがあるけど……

「へー、あれはあんたがやったのかい？」

顔になんの感情も出さずに話すネコートさん。
ネコートさんに般若みたいな顔でおこられるのは慣れてたけど、顔から感情が読みとれない分この方がずっと恐ろしい。

ってか、ネコートさん知ってて言ってるよね？この村であんなので

きるの、ラカンと俺くらいだよ。
ネコートさん知ってて聞くとか、ツンデレに加えてドＳキャラ？何なのさ、その一昔前のヒロインキャラみたいな設定は？
だいたい、今ごろそのキャラづくりはきびｓｈーふぎゃぁっ！？

「あんた、今へんなこと考えてなかったかい？」

ビンタ……ネコビンタ。

例のごとく、ベクトル操作による反射を貫いてくるネコートさんのギャク補正１２０％の強烈ネコビンタをノーガードの状態ですげぇいい角度でくらっちまった。
なんなのさ？そのギャク補正は？
そういう意味じゃ、古龍よりネコートさんのが強いと思う。だって、反射しようにもネコートさんの体には正体不明の膜っぽいのが覆ってあり、それが邪魔で演算ができないのだ。
これが、ギャク補正なのか？

「……すいませんでした」

最近思うんだけど、女の人には人の心を読む能力が標準装備されているのかい？

「それで？他に言うことは？」

他に？
確かに大きな事をしでかしたけど、やった事といっちゃ山を半壊させて、クシャルダオラを倒した事くらいだろ？ネコートさんがフェイトの事を知っているとは、思えないし……

うーん、わからん。
ネコートさんは、確かに恐いけど理由なく怒るような不躾な性格じゃないから、何かしら理由があるのだろうが、まったくわからん。
「特に……他には心当りがない……ですけど……？？」
俺が言い終わったその時、さっきまで感情の篭っていなかったネコートさんの表情が、みるみるうちに般若のような表情に変化していく。
「へぇーそうかい。
じゃぁ、あんたが移動の際に壊した建物は誰が悪いのかね？管理していなかったあたしが悪いのかい？」
っう／／
そういや、それがあったか……
あん時は、一心不乱だったから周りに気を配る余裕がなかったんだよ。
「いっいや、俺が悪いです。はい……」
「しかも、あたしに黙って無許可で雪山に侵入、更に無許可で古龍種の討伐、そして山を半壊。
これだけやっといて、口から出る言葉は山を半壊させた事だけとは、あんたも随分と偉い御身分になったもんだねぇ？」
やばい……
かなり、怒ってらっしゃる。
本来、モンスターの生息している地域…今回なら雪山なのだが、そ

こに立ち入るためには依頼という形をとり、その上で土地の管理者の許可がなければ入る事ができないのだが、それを今回は完全に無視しちゃったのだ。
そして、この土地の管理者はネコートさんとおばば様なんだが、おばば様はあまり動かないため実質ネコートさんが最高管理者ということになる。

そりゃ怒りますね。

「あんときは、一心不乱でして…」

「そんなの、あたしの知ったことじゃないよ！！それでもしもの事があったらどうするつもりだったんだい！？」

何にも言えないな……
クシャルダオラの事を聞いて、そのこと以外の周りのことをいっさい考えずに行動した俺が１００％悪い。

勝てたからよかったけどこれで、もし俺がクシャルダオラに負けてしまってたら、興奮したクシャルダオラが村を襲っていたかも知れないし……
もしかしたら、フェイトが引いてなかったら……

軽率だったな。

「ほんとにごめんなさい」

今度は本気で。
面白いとか、そんなんじゃなくて真剣に本気で頭を下げる。そして、頭を上げると困った母親のような顔のネコートさんがいた。

「ほんとにそうだよ、あんたが強いってのは知ってるけど勝手に古龍種に喧嘩売りにいくんじゃないよ。
あんたじゃなきゃとっくにお陀仏だよ、心配するこっちの身にもなってみな」

最後に「まぁ、あんたがクシャルダオラって聞いて黙ってるとは思っちゃいなかったけどね」と笑いながら、言うネコートさん。

「無事でなによりじゃ」

今まで、黙っていたおばば様が言う。

本当にこの人達はありがたい。
この世界に生まれて命を救ってくれた恩人でありながら、今まで支えてくれてた大事な人達だ。

軽い気持ちでの転生だったが、この人達と両親、ジンさん、そしてラカンと出会い、その人達からの思いを受け取ってからは自分の大切な人生だと考えれるようになった。
村の人からは、ありすぎた力から『鬼神の童』『災厄の化身』とか蔑まれてきたが、この人達は、そんなフィルターで俺を見るのではなく、俺を俺として一個人として見てくれた。

そんな人達だから、やっぱり守りたい。
俺には貰い物の力だけど、それでも守れる力があるのだから、この人達を守りたい。

フェイトが俺というイレギュラーを見つけてしまったいじょう、『完全なる世界』が俺を無視することはないと思う。

自惚れじゃなく俺にはそれだけの、戦争を左右するだけの力があるから。

だからこれいじょう、この村にいてはネコートさんにもおばば様にもジンさんにも母親にも迷惑がかかっちまうから、ラカンと旅することにする。

旅の最中に名をあげて俺がこの村にいない事を証明すれば村が襲われることはないしな。

本当にラカンの旅といい、タイミングといい漫画みたいな、ご都合主義ってやつか？

ほんとよく出来てるよ。

「2人とも心配してくれてありがと。
それでさ理由はいえないけど俺、明日からラカンと旅することにしたんだ」

言った瞬間、ネコートさんが驚いた。
そりゃ驚くよな。
だって、俺まだ3才児だぜ。

「あんた、なに言ってんだい？
今回の件で負い目感じてるんだったら、あたしの管理が行き届かなかっただけだから気にしなくて良いんだよ。
村の連中には、あたしから言っとくからさ。なにしろあんたはクシャルダオラを倒して村を救ったんだ気にすることはないんだよ」

やっぱ、ツンデレだ。

ちょーデレデレだね。
マジで泣きそうだよ、マジで……

「そうことじゃないんだよ。
俺には守りたいモノがある、そのために必要なことなんだよ」

「あんたが村をでてかなきゃできないことなのかい？この村じゃできないことなのかい？」

あぁ、だめだ。
優しすぎるぞ、このネコは。

「そのくらいにしなネコート」

「おばば……
あんたからも、何か言いなよ。
こいつ……こいつ……」

おばば様は、もう涙を流しているネコートさんの頭を軽く撫でながら諭すように口をひらく。

「大丈夫じゃよ。
この子は強い、力だけじゃなく、その力を正しく扱う強い心があるからのぉ。
その子が言ってるんじゃ、ならわしらのする事は、この子を引き止める事じゃなくて応援することじゃろ？」

「……そうだね。
あたしとした事が、何をしていたんだろうね？みっともないよ」

そして、ネコートさんは顔をあげる。
そこには涙はなく、姐御の顔がある。

「行ってきな。
あんたの思うようにやってきな。
あたしらが、応援してるんだから中途半端は許さないよ」

「おう、当たり前だよ」

「それじゃ、母親説得してきな。
諦めるんじゃないよ」

ニシシッと、悪戯っ子のような顔で言うネコートさんと、黙って見守るおばば様。
本当にいい人達だ。
だから守る。俺の勝手な責任の押し付けなのかも知れないけど、それでも守らなきゃいけない。

「それじゃ、行ってきます。
ネコートさん、おばば様」

立ち上がって、家へと向かって歩き出す。ネコートさんを説得できたんだ、母親をここで説得できなきゃ見せる顔がない。

覚悟を決めて走りだす。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3175k/

とあるネギと一方通行

2010年10月10日19時02分発行